

India

[インド]

写真・文＝山崎裕一（写真家）

インドの色彩を求めて

早朝からオールドデリーのモスクに礼拝に訪れた人たち。
この地域にはさまざまな宗教の施設が集まっている



a



b



- a. インド西岸のムンバイの市場で。2羽のニワトリがけんかを始め、人だかりができていた。逆立った羽と真っ赤なとさかに西日が差し、なんとも美しい瞬間だった
- b. オールドデリーには紙問屋が集まり、紙の束を頭に載せた人たちが通りを行き交う
- c. ムンバイ・ウォルリ地区の漁港には、漁を終えた数多くのボートが泊められていた

場合は、この国の色彩に魅せられた。インドの色彩といって有名なのは色水や色粉をかけ合うホーリー祭だが、それだけではない。露店に並ぶ品々、海に浮かぶボート、女性たちが身にまとうサリー。どこを見ても驚くほど色鮮やかだ。そんなインドの色彩を写真に収めたくて、カメラを持って何度も訪れた。

インドの首都デリーは、ニューデリーとオールドデリーに分けられ、それぞれ異なる顔を持つ。イギリス統治時代に再開発されたニューデリーには多くの政府機関や企業が集まり、国の政治・経済の中核としての役割を果たしている。スーツとネクタイでピシッと決めた男性もいれば、ポロシャツなどカジュアルな服装で働く人や、民族衣装を着た人の姿も。さまざまな色や個性があふれるにぎやかな街だ。

一方、古くからの街並みが残っているのはオールドデリー。中央部にはインド最大のモスク、ジャーマー・マスジッドがそびえ立つ。イスラム教徒の多い地域だが、他にもシーク教やジャイナ教の寺院もあり、さまざまな文化が混在している。通りを歩いていると、小さなモスクの前に佇む男性たちが目に入った。偶然並んだ3人の服が赤・青・緑のコントラストを成しており、思わずシャッターを切った。



オールドデリーの街角で、色鮮やかなサリーを身にまとう女性たち

ホテルで目を覚まし、朝食を買いに大通りへ出る。絶え間なく鳴り続けるクラクションとガソリンの匂いが、この国に戻ってきたことを改めて感じさせてくれる。広大な大地に12億を超える人々が暮らすインドは、文化や風習の多様性も抜き出している。言語一つとっても、800種類もあるとか。毎回違った表情を見せてくれるこの国は、何度訪れても飽きることがない。

インドを旅する人の中には、食に恋をする人もいれば、人懐っこい人々の気質やゆったりとした時の流れに心を奪われる人もいる。私の



さまざまな色彩や柄を持つ民族衣装サリー。女性たちは結婚式などのパーティーの場だけでなく、普段着としてもサリーを身に着けている

ヒンズー教の神であるガネーシヤの誕生を祝う祭りがあると聞き、デカン高原に位置する内陸の都市ブネを訪れた。寺院や家にはガネーシヤ像が飾られ、周りにはたくさん色の照明や生花で飾り付けられている。メインロードでは大規模なパレードが開かれ、人々が大音量の音楽に合わせて一日中踊り続ける。

あまりの人混みに圧倒され小道に逃げ込むと、ホテルの裏口ではホテルマンたちがたむろして祭りを眺めていた。おそろいの緑の制服を着て何やら議論を始めた彼らの前を、黄色いワンピースを着た少女が、祭りに疲れたのか退屈そうに横切った。日常の装いから色を楽しむこの国では、人々の何気ない偶然の交差が街を彩ってゆく。

インドの人々にとって「色」とはどういう意味を持つのかを尋ねたことがある。すると友人はこう答えた。「インドの豊かで色鮮やかな自然から、人々はインスピレーションを受けているのかもしれない」

訪れるたびに、この国は変化している。今や多くの人がスマートフォンを片手に友達との会話を楽しみ、街では女性の権利を訴えるデモにも出会った。初めて訪れた際には目にしなかった光景だ。デモに参加していた学生の一人が話してくれた。「世界でもトップクラスのIT産業が、インドの人々の生活を大きく変えた。しかし、社会的・文化的にはこの国が世界に立ち遅れている部分が多い。僕らの世代には、それを変える責任があるんだ」と。

次にこの国を訪れるときには、一体どんな色を見せてくれるだろうか。美しい色彩を持つこの国の未来を、彼らが彩ってくれることを願いたい。



雑貨屋の前で母親の買い物が終わるのを待つ少女

ムンバイのインド門の近くで。インド国内からも多くの観光客が訪れており、さまざまな色が交錯していた



山崎 裕一 (やまざき ゆういち)

1989年、愛知県名古屋市生まれ。東日本大震災をきっかけに写真を撮る。インド留学時にその色彩に魅了され、ストリートスナップを撮り始める。現在はバングラデシュでロヒンギャ難民の実態や、日本国内で若者の生活などを取材している。



d

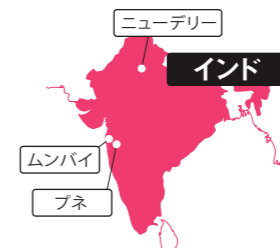


f



e

地球ギャラリー vol.114



- d. ガネーシヤの生誕祭が開かれている最中のブネ。路地裏では、談笑するホテルマンと手前を横切る少女が着る服の緑と黄色のコントラストが印象的だった
- e. ブネの昼間のマーケットは買い物客で溢れかえる
- f. ブネの古本屋で本を物色する男性。インドでは原色を基調にしたビビッドな色合いの建物が多く、夜は照明の光で昼間とは違った表情を見せる

インド三大祭りの一つといえば

ホーリー祭



人々は「ハッピーホーリー!」と言いながら祭りを楽しむ

北インドで春を呼ぶ祭りといえばヒンズー教の「ホーリー祭」、別名「色掛け祭り」だ。祭りの数日前から、街にはカラフルな色粉や水鉄砲

を売る露店が現れる。普段は埃っぽい風景に原色が溢れ出すと、子どもはもちろん大人たちも皆、浮き足立ってくる。

当日は、大勢の人々が朝から色粉や色水を掛け合って春の訪れを祝う。家族や知り合い、通りすがりの人でも誰彼構わず、お互いの顔や体に色粉をなすり付け、「ハッピーホーリー!」と声を掛けては笑顔で抱き合う。子どもたちは水鉄砲や水風船に色水を詰めて、道行く人をめがけて発射! 無礼講で楽しむこの祭りは、“世界一カラフルで過激な祭り”と呼ばれ、外国人にも容赦しない。意を決して外を歩けば、数十分のうちに頭からつま先まで色まみれ。当日は、“色を付けられてもよい服”を着て出掛けなければ悲惨な目に遭うことは肝に銘じよう。

豊穡祈願が由来だというホーリー祭は、今年は3月2日がその日に当たる。日付は太陰暦に基づいて毎年変わるため、祭りが終わると不思議なほどパタリと気候が変わる。短い春、そして長くて厳しい夏がまたやってくるのだ。



祭りのグッズを販売している露店

地球ギャラリー

インドの文化を知ろう!

インドの食事といえば、まず多彩なカレーを思い浮かべる人が多いが、マーケットや祭り会場などの屋台で売られる“立ち食いスナック”も見逃せない。日本でも知られているサモサ(ジャガイモ揚げ餃子)から、天ぶら風の揚げ物、豆の煮物、サラダ、さらには激甘スイーツまで、実にバラエティーに富んでいる。締めはもちろん、チャイ(スパイス入りミルクティー)で口を潤す。

「アルー」はヒンディー語でジャガ

イモを意味し、インドでは世界第2位の生産量を誇るほどよく食べられている。今回紹介するアルー・ティッキ(饅頭)は、衣のないコロッケとも言おうか。屋台で注文すると、大きな鉄板で焼かれた熱々のアルー・ティッキに、甘酸っぱいタマリンドのソースやミント入りヨーグルト、刻んだ玉ネギなどを、本体が見えないくらいにどっさり掛けて出してくれる。これをパンに挟んでハンバーガーのように食べるのも、現地では人気だ。

【RECIPE】

●材料(2人分)

ジャガイモ3個/玉ネギ2分の1個/ショウガ1片/コリアンダー生葉(または粉)適量/片栗粉大さじ1程度/粉唐辛子小さじ1/ガラム・マサラ(またはカレー粉)小さじ1/塩少々/サラダ油適量

●作り方

- 皮をむいたジャガイモを柔らかくゆでて、熱いうちにつぶす。
- フライパンに油を熱し、ショウガと玉ネギ(みじん切り)を加えて、玉ネギが半透明になるまで炒める。
- ②の粗熱を取ったらジャガイモと合わせ、刻んだコリアンダーの葉と片栗粉、粉唐辛子、ガラム・マサラ、塩を入れて手でよく混ぜる。固さは片栗粉で調整する。
- 生地を6つに分け、手に油をつけてハンバーグのように形作る。
- フライパンに多めの油を熱し、両面が金色に色付いてカリカリになるまで焼いたら出来上がり。ケチャップやヨーグルトをかけて召し上がれ!

屋台で人気のスナックといえば

アルー・ティッキ



屋台ではこんがり揚げ焼きにされる